

「元気いっぱい・笑顔いっぱい」

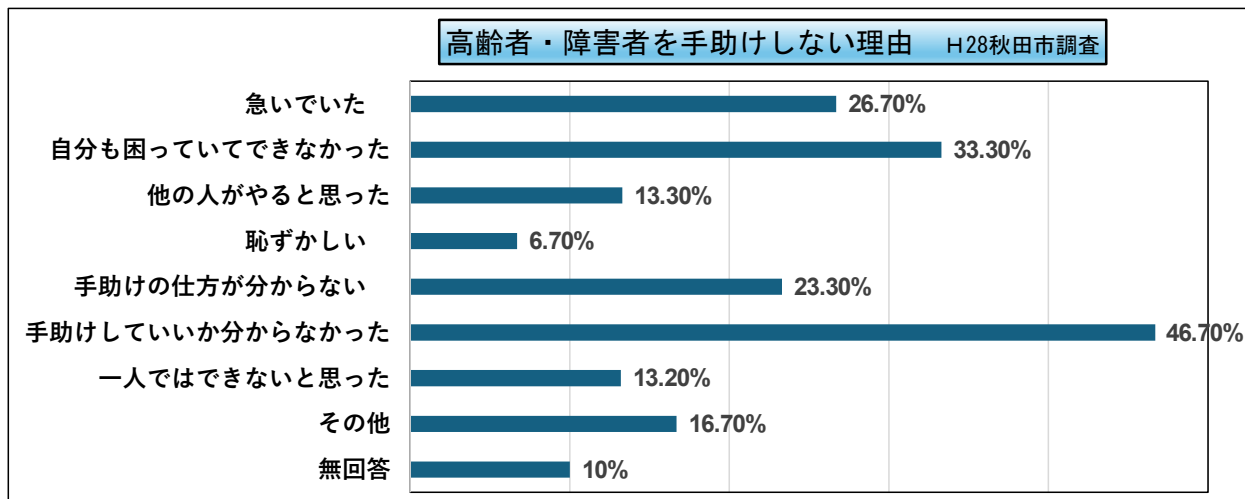
特別支援教育統括コーディネーター 加賀谷 勝

「想像力と勇気をもとう」

12月4日付「秋田さきがけ」に、中学生人権作文全国コンテスト県代表作品で、大仙市の中学生がダウン症の弟をつづった「僕の大切な弟」を掲載していた。

弟にできないことがあっても、「遅い」とか「おかしい」と思ったことはなく、むしろ、人よりも覚えることに時間はかかるが、諦めずに挑戦し続ける弟に強さを感じる。誇らしく、時にはうらやましく思う弟を通して、社会に目を向けたとき、車椅子で生活している人が段差を降りられない「物理的な壁」、そんな困っている人に手を貸すことなく、じろじろ見てしまう「心理的な壁」が、障害のある人たちを生きづらくしていると問題提起している。

全ての人が相手を理解し、尊重し合える社会をつくるためには、「想像力」と「勇気を出すこと」が必要である。困っている人を見付けたら、どんな助けが必要かを想像し、勇気を出して「何かお手伝いしますか」と声を掛けてみることをみんなが意識して、行動を積み重ねることで、社会を変えていくことができると伝えている。



上のグラフは、手助けを必要としている人への気付きはできているのに、対応の仕方が分からない戸惑いや恥ずかしさ、相手のことを知らない勝手な思い込みや不安、面倒なことに巻き込まれたくない余裕のなさを示している。

小さい頃から高齢者や障害者がそばにいる環境であれば、偏見や差別は生まれまいだろう。いろいろな人たちと交流する機会を系統的・発展的に計画する必要がある。そして、自分にだけ向いていた目・耳・口・手・足、そして時間と気持ちを、相手の思いや困っていることを想像し、ほんの少しの勇気を足して行動できる子どもを育てたい。誰かがではなく、自分が他人のためにできることがたくさんあるはずだ。



「もうすぐ小学生」

ある園での一コマ。お遊戯会の練習が終わってお部屋に戻り、自由遊びの時間になりました。男の子が「もうすぐ1年生になるからこれを読もう」と言いながら、本棚からいつもとは違う絵本を取り出しました。うれしそうな表情から、小学生になるんだという喜びが伝わってきました。卒園、入学の大きな節目を迎え、子どもの心が少しずつ動き始めています。